

第2回日本在宅医療連合学会大会 報告

第2回日本在宅医療連合学会大会が6月27、28日と国立研究開発法人国立長寿医療研究センター在宅医療・地域医療連携推進部長三浦久幸大会長のもと開催された。

COVID-19 pandemicにより、当初予定していた名古屋国際会議場での開催を断念し、ZOOM Webinar形式での開催となった。

大会基本テーマは「在宅医療から、ふとく、ながく、私らしく生きる未来に向けて発進～多様な暮らしを支える高い専門性と多職種協働～」であり、「自分らしく生きる」を実現するための意思決定支援や、多職種協働のセッションがWeb口演された。今だからこそ議論すべき在宅医療・療養におけるCOVID-19対応という専用チャンネルも設けられ関連するシンポジウムも行われた。

指定演題をWeb口演とし、ポスターは、プログラム検索&抄録閲覧システムConfitを利用してWeb上でPDF閲覧とした。懇親会はもちろん中止であったが、シンポジウム数は63、教育講演数は7、スポンサーセミナー数は2、ランチョンセミナー数は23であった。ランチョンといってもネット環境であるため自宅で好きな食事を摂りながら遠隔参加できる形式で3密とは無縁であった。

前述のポスタープログラムは参加者の交流を深めるために6月25日から7月5日まで提示され、発表者への質問は6月25日から可能となり、回答は6月27日(土)28日(日)の2日間設けられた。

今回の経験を踏まえて考えるに、新型コロナ感染の影響でWeb開催の学会が次回も引き続き行われる場合には、ポスター発表もすべて今回同様口演として、期間を開示して質問に答える形式が参加会員全員の時間を有効に使用できて良いのかもしれない。Activeに参加し、じっくり議論ができて、質問も幅広く募ることができる。従来のように時間に追われて発表し単にポスターを眺めて終わることが少なくなるから。

市民公開講座は「人生の最終段階を考える。食べられなくなったら、どうしますか？」

というタイトルで多くの参加者をあつめた。今回の全体の大会参加人数は2062名。それぞれの口演では講演中にon lineで参加している会員実数がある。まさにYOUTUBEなどのライブ配信と同じだ。ネットの気軽さの反面、同時に複数のセミナーやシンポジウムを視聴できないこと。ZOOM荒らしを防ぐため、事前登録および入金に参加する上で必須となること。登録制のため自分のID、セッションのID、それぞれのシンポジウムパスワードと少なくとも3回入力しなくてはいけないことが面倒であった。事前登録をしていない会員やシステム事情を把握していない、もしくは理解できていない会員からの電話が学会事務局にも早朝からいくつか寄せられたが、今後このシステムが全国的に浸透すれば徐々に改善されることとなる。

日本在宅医療連合学会は約3年にわたる話し合いを経て、日本在宅医療学会と日本在宅医学会とが新しい年号(令和)が始まった年の5月に合同し、生まれ変わった。学会の会員システム集計によると6月末の会員数が4171人と大所帯となり、その名の通り在宅医療を行う開業医の占める割合が多いものの、関連する他の医療職種の入会も増加し活躍の場となっていることが実感できる。大会ではよく座長も忘れてしまうが〇〇先生ではなく皆等しく〇〇さんと呼ぶことになっている。学会所属の多くの会員は土日患者さん達のケアのために時間が拘束されるため、このようなネットを利用した新しい学会形式は時代の先取である。





今回一部のシンポジウムは残念ながら中止となったが数多くのシンポジウム、発表が on time で無事配信された。従来の大会のシステムと全く異なり、他の施設や他職種との直接のコミュニケーションができないこと、懇親会、二次会などでの酒を酌み交わしてのコミュニケーションも一部 Web 飲み会となり失望の声もあったが、日頃行われている医療業務の合間に時間や場所服装などを気にせず自由参加できるとのポジティブな意見も多かった。

学会の高揚感や緊張感に欠けるとの意見もあるが、自分のくつろげる環境でじっくり講演を選んでクリックするだけで参加することができ、質問も画面の Q & A (QAA) クリックで簡単に記載可能である。講演時間に余裕があれば記載した質問にはすべて演者が丁寧に答えてくれるという点は評価に値する。

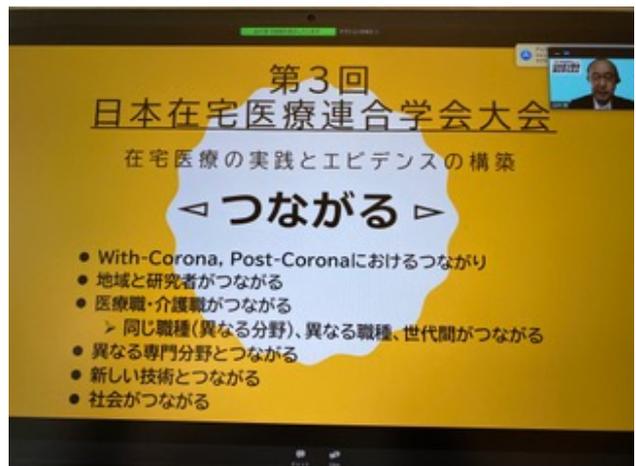
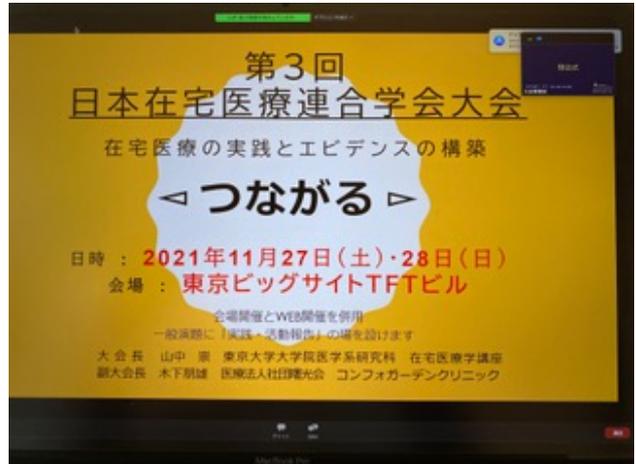
さらに会場への移動費用、宿泊代、時間的拘束、食事代も節約することができ、新型コロナウイルスによる医療収入の減収を学会参加しながらカバー？できたかもしれない。

大会事務局は前日も当日も休み無く大変であったが、運営委託会社は大所帯ではないが責任感にあふれて好感をもてた。学会事務局は事務員二人の前準備、各種委員会含めたスケジュール管理や書類発送などは大変で事務室は段ボールの山であったが、一度システムが動き始めるとそれぞれの理事、会員の実行力、手腕におまかせできるため当日はバックアップ程度でいつもの休みのない大会ストレスとは無縁でいられることができ、最後の閉会宣言も自宅で聴講できた。

まさに“在宅”学会である。

最優秀演題の佐藤智賞は、日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニック 古屋裕康さんが受賞された。

次回第3回大会は、東京大学大学院医学系研究科 山中 崇大会長のもと 東京で開催の予定。



第2回地域フォーラムは、福岡県 穎田病院 本田宜久大会長。こちらも第2回大会同様にWEB開催の予定。

